

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人北海道演劇財団	
施 設 名	扇谷記念スタジオ・シアターZ00	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	6,595	(千円)
公 演 事 業	5,131	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	1,464	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	シアターZ00 企画公演 渡辺源四郎商店 「背中から40分」	2019年5月17日～19日	作・演出：畑澤聖悟（渡辺源四郎商店） 舞台美術：山下昇平（ビーンズワークス） 出演：斎藤歩（札幌座）、 三上晴佳（渡辺源四郎商店）ほか	目標値	280
		シアターZ00		実績値	313
2	シアターZ00 企画公演 鷗座「火曜日はスーパーへ」 「HER VOICE」	2019年5月10日～12日	演出・美術：佐藤信（鷗座） 舞台監督：岡島哲也（ヨルノハテ） 出演：龍昇（龍昇企画）、 竹屋啓子、大月秀幸（夢工房）	目標値	280
		シアターZ00		実績値	258
3	シアターZ00 企画公演 劇のたまご「大どろぼう ホッツェンプロッツ」	2019年12月6日～8日	原作：オトフリート・プロイスラー 演出：清水友陽（劇団清水企画） 出演：磯貝圭子（札幌座）、 前田透（木製ボイジャー14号）ほか	目標値	360
		シアターZ00		実績値	389
4	シアターZ00 企画朗読公演 すすきのを爪弾 「聖夜の憂哀歌」	2019年12月23日 ～24日	作・演出：斎藤歩（札幌座） 照明：熊倉英記（ステージアンサンブル） 出演：西田薫（札幌座）、山木将平、 斎藤歩	目標値	200
		シアターZ00		実績値	149
5	シアターZ00 劇作家 育成公演 「女と男、座面と境界」	2019年9月20日～23日	作・演出：小佐部明広（プロトパスプア）、 前田透（木製ボイジャー14号）、 竹原圭一（RED KING CRAB）	目標値	330
		シアターZ00		実績値	312
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>平成31年度・令和元年度(2019年度)は、3年計画で実施した劇場事業改革の最終年度でした。齋藤歩が芸術監督に就任しすべての事業を点検した結果、札幌で他の民間小劇場には取り組めない先鋭的な公演事業や、その公演事業にリンクした人材育成事業や普及啓発事業を立案し、ほぼ計画通りに実施、その成果は入場者率・収益率・劇場稼働率などの数値にも現れていると考えます。</p> <p>この3年間掲げ続けたミッションは、「創造型劇場」として<1>北海道演劇における先端品質というブランド化、<2>次世代劇作家・演出家の育成、<3>若手演劇人にとっての目標となる劇場ブランドの醸成、<4>観光資源としての地場産業化、<5>演劇の次世代ビジョンを研究・提言する広場の形成、でした。「地域密着型劇場」としては<1>ワークショップリーダーの育成、<2>近隣の老人介護施設・児童会館へのアウトリーチ拡充、<3>高齢者・子ども・子育て向けのプログラムの充実、<4>近隣住民が参加できるボランティア組織の充実、<5>近隣他分野劇場（札幌コンサートホールkitara・札幌市子ども人形劇場こぐま座）との連携強化、などを掲げてきました。このミッションに取り組むべく、施設の強みでもある芸術監督の齋藤歩とプロデューサーの木村典子の人脈を活用した数々の事業を立案し、運営母体である公益法人北海道演劇財団の評議員会・理事会の承認を受けて実施してきました。あわせてNPO法人札幌座くらぶなど外部モニターに活動に対する評価を聞き、事業に反映させてきました。</p> <p>改革を開始してまだ3年ではありますが、その成果が確実に数字として、そして質の向上として表れていると実感しています。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>この3年間にわたる改革で、札幌市民、北海道民が当劇場に期待する内容が具体的にになってきました。それに応える形で、令和元年度は芸術監督が臨機応変に、劇場の空き状況を見ながら特別企画公演と銘打ち、様々な取り組みを行ってきました。これらの取り組みも劇場への人の出入りの増加につながり、文化的、社会的、経済的意義の認知が地域で広く進んでいると考えます。</p> <ul style="list-style-type: none">● 教育機関、福祉施設、医療機関等との連携や青少年の育成、障がい者等への取り組み 札幌市中学校文化連盟演劇専門委員会・北海道中学演劇発表大会実行委員会との連携で継続している「中学演劇部のための創作ワークショップ」（講師：畑澤聖悟／青森・渡辺源四郎商店）が年々充実し、中学演劇が活性化しています。このような流れが、札幌を代表する劇団イレブンナインとの提携公演・中高生による創作劇「はじまりは、おわりで、はじまり」につながりました。札幌厚別高等学校、札幌琴似工業高等学校定時制、北海道新篠津高等養護学校、この3校の高校演劇部に小劇場を解放し上演する「高校演劇解放区」にも初めて取り組み、学生の公演でありながらも満席の集客を実現しました。この他にも小・中・高校へのコミュニケーションワークショップ講師派遣や、北海道医療大学との連携で継続している模擬患者実習OSGIEへの俳優派遣による医療機関との連携も行っています。アートで子どもの療育をサポートする放課後等デイサービス「ペンギンアート」に通う発達障がいをもつ児童へのワークショップを実施するとともに、協働での舞台美術製作も2年目となり、製作物の質と量を充実させて札幌演劇シーズン2019-夏で「ぐりぐりグリム～シンデレラ」を再演しました。● 地域住民の鑑賞活動及び文化芸術活動の拡大、地域の活性化や町おこしの取り組み 定期的な寄席公演やシアターZ00サロン開催を通じて周辺住民との交流を継続する一方、同じ中島公園エリアにある札幌市子ども人形劇場こぐま座への専門家派遣による創造・ワークショップ、さっぽろ雪まつり期間中の中島公園の風物詩「ゆきあかり in 中島公園」への参加・協賛などのほか、札幌在住のチェリスト・土田英順による東日本大震災復興チャリティーコンサートにも劇場を提供し、地域住民との連携で演劇以外の事業にも取り組みました。 <p>また、劇場入口の案内板に齋藤歩や札幌座所属俳優が出演するドラマや映画の告知を始めたところ、スタジオに出入りする俳優と地域住民との交流が驚くほど活発になり、地域での劇場の認知度も高まりました。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

●公演事業の数値的指数として設定したシアターZ00企画公演6事業/21回公演の入場者数をみると、渡辺源四郎商店「背中から40分」(入場者率86.9%)、劇のたまご「大どろぼうホツェンプロッツ」(入場者率97.2%)の2事業については目標値を達成しましたが、鷗座「火曜日はスーパーへ」「HER VOICE」(入場者率71.7%)、ru企画「聖夜の憂哀歌」(入場者率55.2%)、劇作家育成公演「女と男、座面と境界」(入場者率69.3%)の3事業に関しては、目標値の設定は適切でしたが、ゴールデンウィークやクリスマスと重なるなど実施時期の設定や事業の告知や宣伝活動の弱さもあり、達成には至りませんでした。

なかでも、「劇のたまごシリーズ」は、初年度2016年の入場者率は60.0%、今回の「大どろぼうホツェンプロッツ」では97.2%と、未就学児から大人、外国人、障がいをもつ児童など観客層は多様に広がり、未就学児を含む高校生以下の観客が57%と事業の趣旨を達成した数値になりました。

全体としては入場者率目標76.6%に対し76.0%の達成率であり、各事業の集客状況を分析して今後の活動につなげるとともに、数値的指数の達成を目指します。

また、公演事業の劇のたまご「大どろぼうホツェンプロッツ」で実施した多言語対応においては、翻訳と字幕の専門スタッフの育成が進んでいる反面、外国人の親をもつ児童の観劇が10人(2.5%)と少ない結果となりました。しかし、地域に暮らす多様な子どもたちの交流の場の提供としては目標を達成できたと考えます。

●普及啓発事業の数値的指数として設定した4事業/32回の参加者数・観客数をみると、「発達障がいの子どもたちへの演劇ワークショップ」と「中学演劇部のための創作ワークショップ」については積極的な参加状況から目標値を達成していますが、「地域の子ども劇団のための創作ワークショップ」だけが達成できませんでした。この事業はこれまで成果発表公演を最終目的にしていたが、今年度より地域の高齢者施設への訪問公演など、演劇を通じて地域社会に参加する青少年の育成と演劇の普及を目標とし、地域の子ども劇団にとって大きな転換となっていました。新型コロナウイルスの感染拡大により事業を途中で中止せざるを得なかったことが未達成の要因のひとつです。

●この3年間、上記の数値的指標のほかに、次世代劇作家育成の具体的な目標として道内各種演劇祭での受賞を掲げていましたが、育成対象者3名のうち竹原圭一(REDA KING CRAB)が「TGR札幌劇場祭2018」(RED KING CRAB「ガラスの動物園」)で審査員賞を受賞し、「TGR札幌劇場祭2019」では大賞(RED KING CRAB「ありあけ」)を射止めました。また、小佐部明広(プロトパスプア)も「TGR札幌劇場祭2017」で特別賞(プロトパスプア「ある映画の話」)を受賞しています。劇場と稽古場を提供することで次世代劇作家の育成を目標としていましたが、20代の劇作家たちの成長を実感しています。この3年間では、希望の大地の戯曲賞「北海道戯曲賞」(公益財団法人北海道文化財団)への入賞は叶いませでしたが、今後も北海道の劇作家の育成をサポートしていきます。

●上記以外に、劇場の賑わいが地域に果たす役割が必要と考え、この3年間の「劇場稼働率」を比較しました。<2017年度44%><2018年度47%><2019年度56%>と、劇場の稼働率は確実に上昇しています。

更に「入場者数+利用者数の合計人数」の比較でも<2017年度10,875名><2018年度11,818名><2019年度12,560名>となっており、劇場に訪れる人数や訪問の事由が確実に増えていることがわかります。

3年間にわたるミッションの設定を終え、令和2年度から次の段階へと進むにあたり、当劇場の運営母体である公益財団法人北海道演劇財団の評議員と理事の方々と複数回にわたり専門的な議論を行い、シアターZ00に対する総括ならびに協議をし、今後3年間の事業における課題や方向性、ミッションを設定しました。なかでも大きな課題は現芸術監督(斎藤歩)の次の担い手を育成することです。今後この大きな課題の解決に向けた事業立案も行う必要があると考えています。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

●公演事業については事業期間・事業費ともにおおむね効率性をもって適切に実施できたと考えます。数値的指標として設定した収益率は目標が 35.7%、結果は 45.8%となりました。しかし、個々の事業を通じて今後検討・改善すべき点も課題としてみえてきています。

劇のたまご「大泥棒ホツェンプロッツ」を 12 月上旬に公演しましたが、アンケートで冬休み期間の実施を望む声が多数ありました。劇のたまごシリーズは、このほか「札幌演劇シーズン 2019-夏」参加作品として札幌文化芸術劇場クリエティブスタジオで「ぐりぐりグリム～シンデレラ」を夏休み終盤の時期にかけて上演しました。夏休み期間にかかっていた日は入場者数が多く、開校後は少ない傾向がみられました。劇場の規模や立地、札幌の大きな演劇イベントへの参加した点を考慮すれば単純に比較はできませんが、今後子どもを対象とする事業については時期を検討する必要があると考えます。

事業費については各事業ほぼ適切であったと分析していますが、チケット料金の設定に関しては今後検討の余地があると考えています。

「劇のたまご」は親子が観劇することを考えるとやや高いのではとの懸念もありましたが、アンケートを見てもチケット料金を指摘する感想はありませんでした。しかし、無料である未就学児の占める割合 (17.4%) が増えてきていることから収支的には厳しくもあります。現段階ではより多くの児童 (未就学児・小学生) とその保護者に演劇の楽しさを伝え、広めることが、地域の中核劇場の役割として大切だと考え、現在の料金設定を維持していきたいとは思っていますが、将来的には検討も視野に入れなければいけないとみています。

道外 (横浜・青森) から創造団体を招へいして企画した鷗座「火曜日はスーパーへ」「HER VOICE」(佐藤信演出)、渡辺源四郎商店「背中から四十分」(畑澤聖悟作・演出) は、日本の一線級の演出家、劇作家が主宰する創造集団です。これら上質な作品に対するチケット料金の設定 (一般 3,000 円) を今後検討していきます。現在、札幌の小劇場でのチケット料金の平均が 2,000 円前後というなか、チケット料金を上げることは勇気がいりますが、作品に対する対価、事業収支の安定を図るためにも必要と考えます。

●普及啓発事業についても事業期間・事業費ともにおおむね効率性をもって適切に実施できました。

「発達障がいをもつ子どもたちへの演劇ワークショップ」は、劇のたまご「大どろぼうホツェンプロッツ」と「ぐりぐりグリム～シンデレラ」と連携させて夏から冬にかけて長期間実施することで、障がいをもつ参加者と徐々にコミュニケーションを深め、演劇への興味を持続させ、ワークショップへの集中度を高めることができました。

「中学演劇部のための創作ワークショップ」は夏休みに中学演劇部を対象に持続的に実施しています。この事業を持続していることで、道内の中学演劇部の数が増え、「北海道中学生演劇発表会」も活性化しています。「中学演劇部から高校演劇部へ」の流れもでき、北海道の学生演劇の活性化と演劇の普及啓発につながっています。

「地域の子ども劇団のための創作ワークショップ」は石狩市の子ども劇団を対象にしていますが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画通りには実施できませんでした。ワークショップの途中で成果発表には至りませんでしたが、積み重ねてきたものを今後表現できる場をもてることを期待しています。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

●視点 1-1<キーパーソンの存在>

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するための資源としてまず挙げられるのが、キーパーソンとしての芸術監督・斎藤歩の存在です。東京での活動実績、テレビ・映画への露出を北海道に戻ってから継続し、知名度も高く、就任以来、企画公演や主催公演の芸術的レベルが明らかに向上し、観客数だけでなく、事業数も増加しています。芸術監督のネットワークで佐藤信氏や畑澤聖悟氏などが創る上質な作品を提供するとともに、フランチャイズ団体「札幌座」の「棲家」(2019年10月)に逝去なさった坂口芳貞氏(文学座)をキャスティングし、坂口氏の最後の舞台を札幌で創り、その名演を北海道の観客に堪能してもらいました。また、芸術監督はテント劇出身で札幌市内の倉庫を自ら改造して劇場に作り替えた経験も豊富です。劇場技術者としても働くこともできる芸術監督として、自ら様々な改造や機材の入れ替え、メンテナンスを実施し、利用者や外部の技術者から劇場が驚くほど使い勝手が良くなったと評価されています。

もう1人のキーパーソンとしてプロデューサー・木村典子の存在があります。長年ソウルで活動した経験と人的ネットワークを企画事業に反映させ、チョン・ヨンドウ氏や山田せつ子氏をはじめ新たにダンス事業を劇場に定着させつつあります。

●視点 1-2<フランチャイズ団体・提携団体などの存在>

フランチャイズ劇団「札幌座」が公演する名作は評価が高く、ここ数年観客数が増加しています。当劇場で公演した「棲家」(太田省吾作)や「葉桜」(岸田國士作)など、50代~60代の演劇ファンにも喜ばれる作品の創造が劇団の強みですが、こうしたフランチャイズ劇団の観客層に、劇場の企画公演である鷗座「火曜日はスーパーへ」「HER VOICE」や渡辺源四郎商店「背中から四十分」などが受け入れられ、劇場の固定客にもなっています。

北海道演劇財団理事に就任した納谷真大氏が主宰するイレブンナインとの提携公演として、中高生による「はじまりは、おわりで、はじまり」を公演しましたが、中高生に小劇場体験をもたらした、新たな観客層の創客につながりました。同じく理事に就任した劇団清水企画の清水友陽氏は、2016年から「劇のたまご」シリーズを創り続け、それまで劇場に取り込めずにいた子どもや親子などのファミリー層を創客し、定着させています。

●視点 1-3<創造活動に関わる建物設備などを活用した取り組み>

中高生による演劇創造や高校演劇部員による「高校演劇解放区」などで、中高生に小劇場を体験してもらい、将来の地域における担い手が育つことを目指しました。また、発達障がいをもつ子どもたちが通う「ベングアート」との協働による舞台美術製作でも劇場を開放し、その広さを活用して伸び伸びと大きなキャンパスにペンキを拓げる体験に子どもたちの表情が輝いていました。

●<安全対策>

2020年3月に実施した提携公演では、新型コロナウイルスの感染拡大防止策として、劇場の搬入口をと観客入口の2か所を30分ごとに開放し換気を徹底したほか、観客席数を抑制して客席間隔を保持、手指消毒やマスク着用徹底の呼びかけを行いました。現段階で当劇場からクラスター発生はしていません。5月には様々な指標を基にした劇場独自の感染症対策のためのガイドラインを策定し、スタジオでの稽古、仕込み、観客の入退場時も含めた実施基準を設けました。

●視点 2<地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する事業として優れているか>

劇場企画公演に畑澤聖悟氏(渡辺源四郎商店)、佐藤信氏(鷗座)、劇場提携公演に山田せつ子氏(振付家・ダンサー)を招へいし、札幌座公演では太田省吾作品に坂口芳貞氏をキャスティングするなど、日本を代表する演劇人や振付家との創造を実現するほか、芸術監督が陣頭指揮を執って作品創造を行い、自らも出演することで、独自のブランド形成につながっています。

事業の企画立案から実施決定までのプロセスは、まず芸術監督とプロデューサーが協議し、北海道演劇財団の理事・評議員のなかの高度な専門性を備えた役員とも協議後、理事会・評議員会に諮り決定しています。近年、演出家や俳優など創造側の人材も理事・評議員に迎え、質の向上が担保されています。

多言語の取り組みとして、「棲家」「だどろぼうホツェンプロッツ」を英語字幕つきで上演し、地域に暮らす外国人や外国人観光客が観劇できるようにしています。バリアフリーの点ではエレベーターのない地下という立地の欠点があり、身体・視覚などが不自由な観客にはハードルが高いのが弱点です。

劇作家の育成事業として、3名の20代後半の劇作家の育成を3年かけて行い、明らかな演劇的成果を得ることができ、今後も引き続き次世代の若手劇作家の育成を推進します。また、「高校演劇解放区」や「音楽コンサート」など新たな事業を柔軟に入れ込み、新規観客層の開拓につながりました。

人材育成にも芸術監督が先頭に立ち、北海道演劇財団の理事である清水友陽氏、納谷真大氏、磯貝圭子氏が中心となり、全国的に見ても高い水準の演劇人材の育成と指導をおこなっています。

文化芸術情報の発信拠点としての機能も強化しています。劇場への人の出入りが増加していることから、寄せられる情報(チラシ・パンフレット)が増加し、それらを掲示・設置する棚も新たに必要が出てきています。北海道新聞への掲載も多く、文化部記者との情報交換も定例化しています。劇場ホームページや、SNS(Facebook、Twitter)を常時更新し、積極的な情報発信を継続しています。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

北海道演劇財団と当劇場が果たすべき役割がここ数年急速に具体的になってきています。

芸術監督・斎藤歩は、北海道文化審議会の副委員長に任命され、北海道全体の文化政策への提言も行うほか、HTB 北海道テレビ放送でも番組審議会の副委員長として道内マスコミへの提言を続けています。また、斎藤が中心となって活動している市民活動のひとつ「演劇創造都市札幌プロジェクト」は、昨年、札幌市の市民文化局との対話の窓口を設けました。このほか、札幌演劇シーズン実行委員会のプログラムディレクターを任命されて5年間プログラミングにかかわるほか、北海道戯曲賞の審査員など、斎藤が芸術監督に就任して以来、急速に北海道の演劇の情報やノウハウなどへの問い合わせや依頼が増えています。

札幌市が管理運営する札幌市民交流プラザ「札幌市芸術文化劇場」との共催事業「All Sapporo Professional Actors Selection」を立ち上げ、その第1弾として「虹と雪、慟哭のカッコウ～SAPPORO' 72」を創作し、稽古はシアターZOO を使って行いました。公共劇場との協働、札幌をはじめとする道内外で活動する俳優やスタッフとの協働、そこから北海道を代表する舞台を創り出す役割を担っています。

道内各地へのワークショップ（学校、社会福祉協議会、企業研修、地域サークルほか）講師の派遣も増加しており、そのプログラムは芸術監督が北海道で独自に積み上げたものであり、現在それらを北海道演劇財団理事に就任した清水友陽、納谷真大、磯貝圭子という次世代の演劇専門家たちが引き継ぎ、担い始めています。

このように当劇場で培われたノウハウや情報、ここで育つ人材が、北海道全域の実演芸術の振興、舞台芸術の発展に果たす役割が明らかに大きくなっていると実感しています。

あわせて、これらの人材による事業の立案・実施・点検を行い、道外の演劇人とのパイプを活用したことでしか観られない上質な作品創造の実現、演劇の専門家による人材育成のための公演やワークショップ、アウトリーチ事業を実施できていると考えます。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

今後も持続的に発展することができる劇場の組織の構築、強化、維持のための取組を以下のような PDCA サイクルで実施しています。

<人材面>

2019 年度に北海道演劇財団の新理事として、次世代演劇専門家である清水友陽氏（劇作家・演出家：劇団清水企画）、磯貝圭子氏（俳優・演出家：札幌座）、納谷真大氏（劇作家・俳優・演出家：イレブンナイン）の3名が就任しました。これまでの理事は企業経営者や弁護士などを中心に構成されており、経営面での提言・助言が活発になされていました。また評議員も文化行政経験者や大学教授、アートプランナーなど、演劇に直接携わる専門家ではありませんでした。演劇人を理事に迎えたことで、芸術監督（斎藤歩）とプロデューサー（木村典子）が立案する事業計画、実施、その総括、そして改善に至る PDCA サイクルに、より大きな負荷がかかり、経営面だけでなく、芸術的な質の担保、道内の演劇人への影響や観客への訴求力などのチェック機能が強化されました。あわせて事業立案の際、評議員・理事の中から特に演劇の専門性の高いメンバーによる複数回の議論を経て、評議員会・理事会への提案・承認に至るプロセスを確立しました。

フランチャイズ劇団「札幌座」だけでなく、理事が主宰する「劇団清水企画」「イレブンナイン」の劇団員がスタジオ（稽古場）や劇場に出入りする環境を実現したことで、若い世代が劇場施設にかかわり始め、これまで芸術監督がひとりで担っていた劇場の日常メンテナンスや管理業務も次世代への引継ぎが始まっています。

「札幌座」の研修生制度を通じて毎年数名の研修生が加わり、その中から年に1~2名の新人が劇団員として活動していますが、ここに「劇団清水企画」「イレブンナイン」の若手も加わり、その新人教育を芸術監督が直接行うなど若手人材との関りを広げることで、新たな人材の確保にも動き出しています。

2024年に札幌駅北口に完成予定の新たな民間小劇場の運営受託も内定しており、それまでに専門的な劇場運営のできる人材を育成する必要があります。これにともない、芸術監督が直接携わりながら若い世代と一緒に当劇場を次世代育成の場として稼働させています。

次世代のプロデューサー育成も急務です。「イレブンナイン」を運営する（株）tattとの協働で、外部プロデューサーとの連携による事業実施も開始し、今後のプロデューサー体制を模索しています。

<財務面>

安定的な収益基盤と財源確保の取り組みとして、運営母体である北海道演劇財団の収支改善が挙げられます。2016年に斎藤歩が芸術監督に就任し、芸術面と経営面で大きな責任を帯び、全体の経営改革にも着手してきました。2017年に大幅なリストラを行い、収益事業である劇場運営の改革も大胆に行い、経常収支の大幅な改善を実現しました。その結果、財務面が改善され、芸術面でも大きく質の向上を実現し、財務面に対する評価も高まりました。

前任者らが開拓した道内各企業からの協賛社・後援会員などの支援者について、芸術家が専務理事と芸術監督を兼任し、経営の先頭に立つことで、弱体化の懸念もありましたが、自ら企業に出向き、事業計画や事業報告をカラービジュアルで説明するなど、支援継続への働きかけを積極的に行い、演劇活動と地域の文化芸術への理解を共有し、この4年間はほぼ増減なく安定的に推移しています。

しかし今年度は、2月~3月の新型コロナウイルス感染拡大による公演の中止や延期に伴い、大きな収入の減少が発生しました。これへの対応として、理事長（秋山孝二）が評議員、理事、NPO札幌座くらぶ会員に限定した呼びかけを積極的に行い「特別な寄付」を募り、多くの個人・企業のご寄付で経済的難局を乗り越えることができました。このように財団と劇場の財務面ならびに運営面をしっかりと支える組織となっていることが、大きな強みであると実感しました。